「神の戒めを守る人」　　2025 年 12 月 12 日

これによって、私たちは真理から出た者であることを知り、神の前に心を安らかにされるのです。たとえ心に責められることがあろうとも、神は、私たちの心よりも大きく、すべてをご存じだからです。愛する人たち、心に責められることがなければ、私たちは神の前で確信を持つことができます。願うものは何でも 神からいただくことができます。私たちが神の戒めを守り、御心に適うことを行っているからです。神の御子イエス・キリストの名を信じ、この方が私たちに命じられたように、互いに愛し合うこと、これが神の戒めです。神の戒めを守る人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。神が私たちの内にとどまってくださることは、神が私たちに与えてくださった霊によって分かります。(Ⅰヨハネ 3：19～24)

主イエスは、最後の晩餐での告別説教の終わりに、「これらのことを話したのは、あなたがたが私によって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、 勇気を出しなさい。私はすでに世に勝っている（ヨハネ 16:33)」と語られた。私たちは、主イエスの「勝利」に既に与っている。パウロは、Ⅱコリント 1 章 19～20 節で「あなたがたの間で宣べ伝えた神の子イエス・キリストは、『然り』と同時に『否』となったような方ではありません。この方においては『然り』だけが実現したのです。神の約束はすべて、この方において『然り』となったからです。それで、私たちはこの方を通して神に『アーメン』と唱え、栄光を帰するのです」と書いている。キリストの十字架と復活によって神からの「生の絶対的是認」という「然り」をいただいている。この「勝利」「然り」をおおらかに信じ、神を称えるのがキリスト教信仰である。

Ⅰヨハネの著者は、前句 18 節で、「子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いと真実をもって愛そうではありませんか」と、具体的な愛に生きるように勧めた。そして、あなたがたは、行いと真実をもって愛し合っているので、「私たちは真理から出た者であることを知り、神の前に心を安らかにされるのです。たとえ心に責められることがあろうとも」と、たとえやましいことがあっても、主イエスの勝利に与り、安らかにされていると語っている。「愛する人たち」と呼びかけ、「心に責められることがなければ、私たちは神の前で確信を持つことができます。願うものは何でも、神からいただくことができます。私たちが神の戒めを守り、御心に適うことを行っているからです」と、神の戒めを守り、御心に適うことを行っているから、「然り」をいただき、神の前で確信を持っていると断言している。そして、守っている戒めとは、「神の子イエス・キリストの名を信じ、この方が私たちに命じられたように、互いに愛し合うこと、これが神の戒めです」と書いている。

主イエスを信じ、互いに愛し合うならば、神の内に留まり、神も私たちの内に留まってくださる。神と主イエスと私たちが共にあり、永遠の命をいただいている。そのことは、神が与えてくださった霊によって保障されている。著者は、主イエスの「勝利」に与り、キリストの「然り」をいただいていると、信仰の喜びを高らかに謳っている。日本のクリスチャンは謙遜で、誠実な人が多い。それは、素晴らしいことであるが、時として、そのため徒に、弱さと過ちに敏感になりすぎて、信仰が弱く、不十分で、自信がないと言うことがあるのではないか。著者のように、主イエスを通して「アーメン」と唱え、信仰の確信を大胆に表わしたいものである。